若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

心臓外科を愛し、心臓外科に愛された？男

釧路孝仁会記念病院
青山（あおやま）　稔（みのる）

東京都出身、杏林大学医学部を卒業、2025年４月より釧路孝仁会記念病院で初期研修医として勤務し、今年で２年目となります。中学から大学までバスケットボール部に所属し、今日も孝仁会バスケ部で週１回やっています。

はじめまして、釧路孝仁会記念病院初期研修医２年目の青山稔と申します。市立釧路総合病院同期の権裕河先生よりバトンをお受けしました。貴重な機会を賜り、感謝申し上げます。

無難なテーマで恐縮ですが、私が心臓外科医を志した理由を述べたく存じます。

私が医師を志し始めたのは幼少期になります。父は医師であり、自宅には聴診器や血圧計、鉗子などさまざまな医療機器、そして診療衣がありました。お医者さんごっこをした際、いつも道具は本物を使っていた訳で、自然と将来の夢は医師となりました。ちなみに、警察官に憧れていた時期もありましたが、父に連れて行ってもらったポリスミュージアムで、父子が誘拐されるような内容のアニメーションを見てから、２週間ほど保育園でお昼寝の時間ずっと泣くほどのトラウマとなり…、選択肢から除外されました。

小学生になると、学校の図書室で医療漫画の金字塔「ブラック・ジャック」と出会い、また当時アニメ版も放送されていて夢中となり、ブラック・ジャックのような天才外科医になりたいと思うようになりました。高学年になると、「医龍」という心臓外科を題材にしたドラマ／漫画が好きになり、それが私と心臓外科学との最初の出会いでした。外科医の腕がメス捌きに焦点を当てているブラック・ジャックとは異なり、医龍では縫合・結紮に焦点が当てられており、かっこいいと感じた私は小学生ながら父や産婦人科医である大叔母に教えてもらったり外科の教科書を読んだりして糸結びを学び、練習するようになりました。

中学生時代にバスケットボールと出会い、勉強嫌いであった私は「医学部志望」と周囲に言うもののよく授業をサボって公園や体育館でバスケをしていました。高校ではついに部活のある日しか登校しなくなり、その結果、医学部受験の際はかなり苦労することになりましたが、１浪の末、杏林大学医学部に入学しました。

幼少期、両親が仕事中に面倒を見てくださった方がいるのですが、私が高校３年生だったときに急性大動脈解離を発症して亡くなりました。父は私の受験に影響が及ばないように訃報をすぐ私に伝えなかったのですが、浪人が決まった際に告げられショックを受けました。医学部に合格できなかった悲しみだけでなく、その方と最後の別れができなかったこと、今までありがとうと感謝の気持ちを伝えることすらできなかったことも重なり、強烈な悔しさを覚えました。そのため、大動脈解離を扱う外科である心臓血管外科に進み、突然のお別れを防げるような緊急に強い外科医になりたいと強く決意しました。

杏林大学には「ひも倶楽部」という外科手技同好会があり、入学してすぐ参加しました。当時ひも倶楽部の活動内容は主に糸結びの練習でしたが、小学生の頃から糸結びを練習していた私は先輩方が糸結びをしている横で縫合練習をしていました。活動時間外でも、ひも倶楽部の恩師である呼吸器・甲状腺外科准教授（当時）の田中良太先生に縫合を教わりに行き、自宅でも毎日練習しておりました。外科共通の基本である縫合・結紮の練習だけでは物足りず、心臓外科特有の運針や血管吻合を学びたく、心臓血管外科学教室に出入りするようになりました。

心臓血管外科教授であり恩師でもある窪田博先生が、使わなくなった拡大鏡を私に貸してくださったのですが、壊す前にさっさと返したい気持ちと、心臓外科以外の進路は全くあり得なかったため、医学部５年次に思い切って拡大鏡を購入しました。拡大鏡を購入してからは練習の幅が一気に広がり、冠動脈バイパス術の練習も始め、他大学やサマースクールなどに足を運んで積極的にウェットラボに参加し、より実践的な練習をするようになりました。また医学部６年次に、窪田先生が修行を積まれたフランスのクレルモン＝フェラン大学心臓血管外科、および母校と提携している北京大学の心臓外科に計２か月留学し、本邦では滅多に経験しないような手術も学ぶことができました。

そんな私は母校である杏林大学の心臓血管外科学教室に入局予定ですが、初期研修の２年間は縁もゆかりもない釧路を選びました。理由は単純なもので、医学部４年次の夏に東医体で苫小牧を訪れた際、夏の涼しさと北海道のグルメに魅了されたからです。港町である釧路は喫煙率が高く、塩分摂取量も多いため、動脈硬化、高血圧に起因する心血管疾患の症例が豊富であり、釧路孝仁会を選んでよかったと強く感じております。釧路生活も残り１年となりましたが、悔いの残らないよう全力で過ごしたく存じます。

最後までお読みいただきありがとうございました。